

トップインタビュー

独立行政法人労働者健康福祉機構
山陰労災病院院長

石部 裕一 氏

この人に注目

自治医科大学とちぎ子ども医療センター
小児科研修医

大谷 英之 氏

鳥取で活躍する女性医師

鳥取県立厚生病院外科

田中 裕子 氏

来たれ研修医!

日本赤十字社

鳥取赤十字病院

病院探訪

南部町国民健康保険

西伯病院

クローズアップ

鳥取の研修医たちの声

KLI NI KOS

とっどりの医療

【クリニコス】

冬号

2011 winter



KLINIKOS

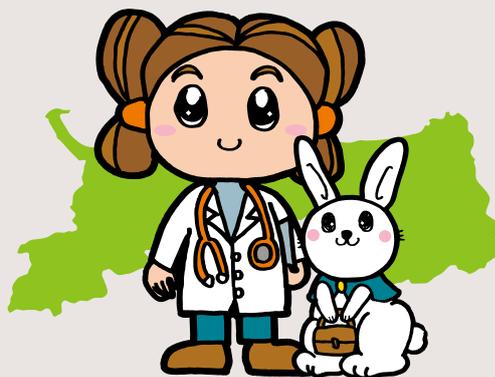
KLINIKOS(クリニコス) ととりの医療

『KLINIKOS(クリニコス)―ととりの医療』は、鳥取県で展開されている医療の魅力を、現役医師の皆さんの生の声で伝える広報誌です。県内の医療機関ではどのような医師が活躍されているのか、どのような研修、チャレンジができるのか、すばらしい先生方の取り組みや思いを特に若い医師や医学生に発信したいと考えて制作しました。

ギリシャ語の「klinikos」は英語／clinicの語源ともなった言葉で、患者に対する医療行為を意味し、米語辞書の代名詞的存在であるウェブスター辞典では、「臨床講義」や「臨床講義室」を指す言葉として紹介されています。

この冊子に紹介されている先生方や医療機関の取り組みに興味を持たれた方は、ぜひ現場を見学してみてください。願わくば、この冊子が鳥取県で研修、勤務いただくきっかけになれば幸いです。

鳥取県福祉保健部医療政策課



医療の神様
「大國主命」と、
神話の地鳥取県

小さな「ありがとう」のために、大きな夢をのせて…。

鳥取県が舞台と言われている神話「因幡の白兔」で、傷ついた兔を救った大國主命は、医療の神様とされています。

CONTENTS

トップインタビュー	4
独立行政法人労働者健康福祉機構山陰労災病院院長 石部 裕一氏 山陰の地に国内有数の医療体制を ぜひともに築き上げていきましょう。	
この人に注目	8
自治医科大学とちぎ子ども医療センター小児科研修医 大谷 英之氏 生まれ育った鳥取の地域医療に高度な診療知識と経験を 持ち帰るとともに、後進の進むべき道を示したい。	
鳥取で活躍する女性医師	11
鳥取県立厚生病院外科 田中 裕子氏 育児をしながらキャリアを積むステップが今、 女性たちの手によってつくりつつある。	
来たれ研修医!	14
日本赤十字社鳥取赤十字病院 副院長／西土井 英昭氏 当院は伝統的に職員間の仲がたいへん良く、 「医師は医師が育てるもの」とは誰も思っていません。	
病院探訪	16
南部町国民健康保険西伯病院 院長／田村 矩章氏 医師には、個性を発揮し、やりたいことに 挑戦してもらおう。それが"西伯病院流"。	
クローズアップ	18
鳥取の研修医たちの声	

取材先病院 MAP



- ① 独立行政法人労働者健康福祉機構山陰労災病院 <http://www.saninh.rofuku.go.jp/>
- ② 鳥取県立厚生病院 <http://www.pref.tottori.lg.jp/dd.aspx?menuid=81952>
- ③ 日本赤十字社鳥取赤十字病院 <http://www.tottori-med.jrc.or.jp/>
- ④ 南部町国民健康保険西伯病院 <http://www.town.nanbu.tottori.jp/p/admin/saihakubyouin/>



独立行政法人労働者健康福祉機構山陰労災病院院長

石部 裕一氏

トップインタビュー

Top Interview

Yuichi Ishibe



山陰の地に国内有数の 医療体制をぜひ、 とともに築き上げていきたいと思います。

院内には丸となって
懸案事項に対する意欲が
満ちあふれていた

私が山陰労災病院に赴任し、3年が
経ちました。大学病院勤務が長かった
私にとって、市中病院院長の立場は新
鮮な経験にあふれていました。何より
臨床の現場に、大学とはまったく異質
な気風がありました。大学には、良い

意味でも悪い意味でも教授を頂点とし
た医局のヒエラルキーが存在していま
すが、当院にはそれがない。

診療科ごとに「我こそは、この道の
プロなり」との自負心を持った医師が
立ち働き、各々の診療科の医師を頂点
にコ・メディカルがサポートする動き
の効率の良さにも目を見張りました。
目から鱗を落とされたと言ってもいい
かもしれません。

赴任した年、当院には大きな懸案が
いくつもありました。病院機能評価バ
ージョン5を受審、オーダリングシス
テム、DPC対象病院への参加など
です。それらの課題を目前とし、院内に
一丸となって懸案事項に対する意欲が
満ちあふれていることに感銘を受けた
のを覚えています。

そんな中、新任院長である私は、シ
ステム導入において思い切った決断を

Profile

いしべ・ゆういち

- | | | | |
|-------|---|-------|---|
| 1961年 | 鳥取大学医学部医学科入学 | 1986年 | 米国ペンシルベニア大学医学部麻酔科客員研究員 |
| 1967年 | 鳥取大学医学部医学科卒業
鳥取大学医学部附属病院にて実施修練 | 1989年 | 厚生労働技官医療職国立大阪南病院麻酔科医長に就任
近畿大学医学部非常勤講師を併任 |
| 1968年 | 鳥取大学医学部附属病院研修医 | 1991年 | 文部教官教育職鳥取大学助教授医学部麻酔学教室に転任 |
| 1969年 | 天理よろづ相談所病院麻酔科医員 | 1997年 | 鳥取大学教授医学部麻酔・蘇生学(現・麻酔・集中治療医学)教室に昇任 |
| 1971年 | 鳥取県立中央病院麻酔科医員 | 2000年 | 鳥取大学医学部附属病院手術部長を併任 |
| 1974年 | 学校法人近畿大学医学部附属病院講師麻酔科採用
京都大学胸部疾患研究所臨床肺生理部門医員を併任 | 2001年 | 鳥取大学医学部附属病院副院長に就任 |
| 1979年 | 近畿大学医学部講師麻酔科学講座に昇任
近畿大学医学部附属病院ICU室長兼務
京都大学胸部疾患研究所非常勤講師を併任 | 2003年 | 鳥取大学医学部附属病院院長に就任 |
| | | 2005年 | 鳥取大学理事・副学長・医学部附属病院院長に就任 |
| | | 2007年 | 独立行政法人労働者健康福祉機構山陰労災病院院長に就任 |

しました。当初計画されていたオーダーリングシステム導入を電子カルテ導入に、言わば格上げしたのです。最初の場合では最終的に電子カルテシステムにいたる道筋も設けられており、オーダーリングシステムから段階的に電子カルテ導入へもっていく計画だったので、私はそれでは遅いと感じました。

現代の医療に求められる質を維持するには、電子カルテによる情報共有は必須事項。少々無理を言っているとの不安を感じつつの指示でしたが、3年を経た今、我ながら的を射た方向転換であったと満足しています。一歩進んだ情報システムを手にして以降、病院全体のトータルな業務の質、医療の質はそれまで以上に向上したと実感します。チーム医療の取り組みなども、情報の共有化によって目覚ましく進んでいると胸を張れます。

スタンダードな医療は、しっかりと提供されている

鳥取の医療についての感想を求められれば、標準医療から救命救急にいたるまで全国水準に届いているという見解を持ちます。巷間喧伝される「たらいまわし」のような、医療崩壊の事例は、私の知る限り鳥取県では起こっていません。満点の医療などはありえま

せんが、地域住民が健康で安心な日常生活を送るにあたって必要とされるスタンダードな医療は、しっかりと提供されていると自負します。もちろん、山陰労災病院院長である私には、スタンダードな医療の質を上げるべく日夜努力する責務があると認識しています。

鳥取県にいても先端の医療を学べる環境は整っている

ただ、一方、特に医学生や若手医師の立場に立ってみると、鳥取県の医療は、先端医療に関する魅力が薄いだろうと推察します。鳥取県で医療をしたいと考える若者たちにとって、それは深刻な問題とも言えるでしょう。日進月歩で技術が進展する現代医療において、自らの技術レベルを伸ばすにも維持するにも、最先端に触れる機会や最先端に進む道のあるなしは重大な事柄だからです。

私が鳥取大学医学部を卒業したのは1967年。思い返せば、学生運動のひとつであるインター闘争（インターン改善廃止運動）の最後の年でした。卒業時にはまだあった旧インターン制度は翌年廃止され、私は鳥取大学医学部附属病院に初年度は旧制度のインターンとして、2年目は研修医として勤務した特異な経験をしています。

その翌年、1969年に鳥取県を離れ、関西の天理よろづ相談所病院へと移りました。その後、一度鳥取に戻りますが、1991年まで延べにして20余年、異郷での生活をつづけました。

医師人生の大部分を鳥取県の外で、ある時期は日本さえ離れてすごした私が、今、鳥取県に戻り、後進育成の機会を得られたことには、いつかは故郷の医療に貢献したいと願っていたので感謝の念を禁じえません。

ちなみに鳥取を離れた理由は、ほぼ「青い鳥症候群」と言えます。外に出ればもつとすばらしい医療があるかもしれない——正直に申し上げて、それ以上の深い考えはありませんでした。

医療は、当時から比較的情報が得やすい世界で、学会や論文などを通して世界の最先端、日本の最先端のあり様が、ある程度は一研修医のもとにもたらされていました。

しかし情報の量と質は現在と比較すれば雲泥の差で、じかに見てみたい、触ってみたいという強い思いがありました。私が前述した思いを抱いたひとつの理由は、明らかにそのような環境にあったと思います。

では、実際に外に出て、どれほどの先端医療を学べたのかと尋ねられたならば、おそらく鳥取県にいても、時間軸

という視点で振り返れば、さほど変わらなかつたと答えるでしょう。

大学を中心に全国レベルの先端医療の展開を

現代はインターネットの普及以降、社会全体が想像を絶する情報化を遂げています。医療界の情報量も伝達速度も飛躍的に伸び、伝統的に最新情報に敏感な研修医や若手医師はさらに情報へのアンテナを鋭敏にしています。

最新情報を得るだけでなくしっかりと理解する人は、あるとき、ひとつの事実にとどり着くでしょう。それは、医療は行う場所によって質が変わるも



のではないこと。医療を提供するための基本的なインフラさえあれば、大都会であろうと地方であろうと同質の医療を展開できる。だからこそ、どんな場所に、どんなインフラがあるのか、どんな先端医療があるのかを見きわめる目が大事なのだとわかってくるはず

です。
私が、鳥取県にある医師の不足、あるいは偏在の問題を解決に導くための「鳥取の医療の求心力」は、先端医療への注力によって生まれる部分はかなりあると思うのは、そのためです。したがって、この地の医療の求心力の低下の責務は、私を含めたこれまでの鳥取大学にあるとも思います。鳥取県で全国レベルの先端医療を展開するならば大学を中心とした総合的な取り組みが必須でしょう。最近、鳥取大学医学部附属病院が導入した手術ロボット「ダヴィンチS」はその象徴的取り組みとして評価します。

加えて、大学が中心となった先端医療が「鳥取の医療の求心力」になったあかつきには力強いサポートが必要。求心力に呼応して集まった人材の、臨床における受け入れ体制です。大学に残り研究の道を進む以外の医師が磨いた手腕を発揮する臨床の場がなくてはなりません。

「あの病院で働きたい」、「あの病院の

臨床に参加したい」と言ってもらえるような医療機関が多く県内にあることが理想です。求心力で若い力を集め、集まった人材に力を発揮する場を提供する。その2つがそろえば、医師の不足や偏在の問題には光明が射すに違いありません。

情熱を満足させる やり甲斐や達成感が 必ずや待っている

山陰労災病院は、私が赴任する以前から、救急医療を積極的に行っている点においてすぐれていると感じます。当院では、初期研修医を救急外来で徹底的に鍛えます。医療安全の見地から紹介状を持った患者は当然のこと、一般の外来初診患者も初期研修医には初診を任せません。彼らが診断のついていない患者を診るのは救急外来のみですが常に指導医が側にいる体制の中で存分に力を発揮してもらっています。

しかし、救急当直に関して、初期研修医には休日の日直以外いっさい当番を設けていません。つまり、自主参加です。ほとんどの初期研修医は、毎日全診療科に各診療科の当直医がいる体制の中で、自分の指導医が当直となった日を救急当直参加日としているようです。

この斬新な体制は、いつしか口コミ

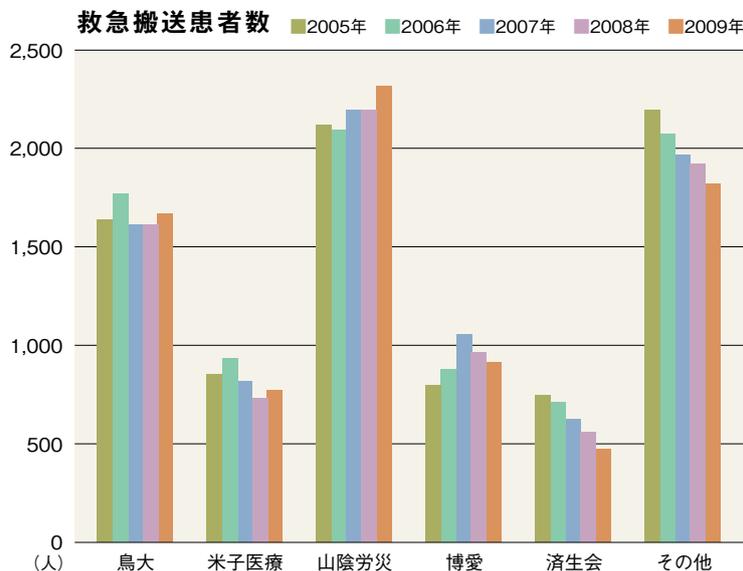
で評判となり、「山陰労災病院でなら、しっかりと学べる」との評価が確立して、やる気のある初期研修医が集うようになりました。2011年度の初期研修医がフルマツチとなったのはそうした評価の表れのひとつと言えるでしょう。

当院のすばらしい臨床研修環境に、私なりのバージョンアップを加えるとするなら麻酔科医、放射線科医、病理医養成へのさらなる注力でしょうか。どなたかがおっしゃっていた「麻・放・病」——つまり、この3診療科は病院が医療を支えるにあたって強固でなくてはならないとの論に、私も賛同するからです。

1990年代に下降の一途をたどった鳥取大学医学部の入学定員は、数年前から上昇に転じています。また、国は医学部の入学定員をさらに増加するようです。鳥取県の医療にとって、10年後、20年後に期待の持てる兆候が起き始めています。私たちは、その兆候を期待に満ちた現実結びつけるためにあらゆる努力を惜しみません。

この記事を読む、医学生、若手医師の皆さん、山陰の地に国内有数の医療体制をぜひ、ともに築き上げていきましょう。必ずや、あなたの情熱を満足させるやり甲斐や達成感が待っていると約束します。

救急搬送患者数



※病院名は略称
※鳥取県西部広域行政管理組合消防局「平成21年の救命活動概要」より作成

この人に 注目



生まれ育った鳥取の地域医療に
高度な診療知識と経験を
持ち帰るとともに、
後進の進むべき道を示したい。

自治医科大学とちぎ子ども医療センター小児科研修医

大谷 英之氏

鳥取県の専門研修医師支援事業への採用が決まった大谷英之氏は、
現在、出身大学である自治医科大学（以下、自治医大）の
「とちぎ子ども医療センター」で小児科の研修に励んでいる。
1年間で小児科医の腕を磨き、帰郷後は生涯、
小児科医・総合診療医として鳥取県の地域医療を支えたいと望んでいる
大谷氏が専門研修医師支援事業に応募したのは、
小児科研修以外に、もうひとつ大きな目的があった。

大谷氏は、2009年、鳥取県専門
研修医師支援事業に応募。小児科医師
として鳥取県の医療の質向上に貢献す
るという明確な目的意識が高い評価を
受け、見事、採用にいたった。

鳥取県専門研修医師支援事業は、鳥

取県に必要な分野の臨床医を、県職員
として県外医療機関に研修派遣する事
業です。

県外から最新技術や知識を県内医療
に還元し、若手医師の指導にも力を発
揮する一方、自らも鳥取県に骨を埋め
たいと考える医師を支援することが狙

いです。

今回、私は小児科の先端の知識や技
術を修得しつつ経験を積み、より高度

な小児医療を鳥取県に持ち帰りたい、
都心でないところでも、それなりの小
児医療が受けられる環境をつくりたい
と考え、同事業に応募しました。

2001年に自治医大を卒業した大谷氏は、2年間の研修を基幹病院である鳥取県立中央病院（以下、中央病院）で受ける。

中央病院で各科をローテートしていた私は、自治医大卒業以来の目標であった総合診療医をめざし、多忙な研修の日々を送っていました。そして、2年間の研修を終えた2003年春、岩美町国民健康保険岩美病院（以下、岩美病院）に入職し、内科に配属されました。ここまでは、思い描いていた地域医療への貢献という道を、予想どおり着実に（笑）歩んでいました。

1年間勤務するうち、大谷氏の針路に影響を与える事態が起こる。岩美病院の常勤小児科医が退職し、小児科が診療中止を余儀なくされたのだ。

もともと子ども好きで、中央病院の小児科部長の先生に「大谷先生は、小児科向き」と言われたこともありました。ですから、岩美病院の小児科閉鎖の事態に遭遇し、「役に立ってるなら」と、小児科医への転身の決意を固めるのに、さほど時間はかかりませんでした。岩美病院の院長の「誰か、小児科を担ってくれないか」との呼びかけには、自然に手を挙げていたという感じ

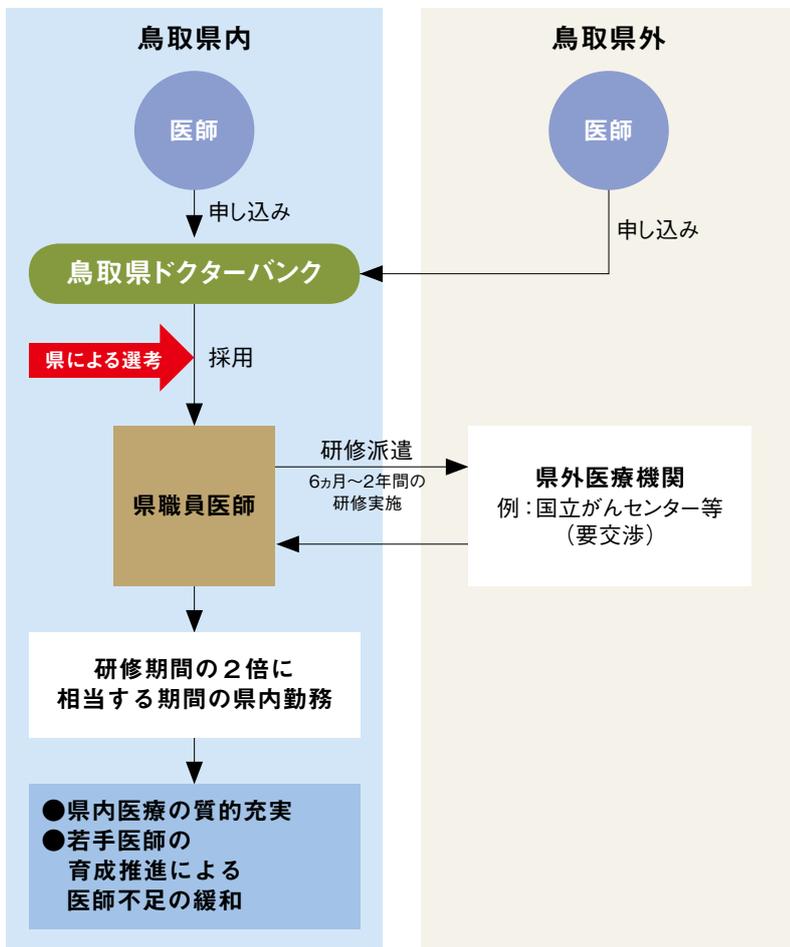
です。

転科が決まると、岩美病院での内科勤務のかたわら、週1回中央病院の小児科に通い経験を積み始めました。翌年には小児科の再開が決まっていたので、まさに必死でした。

2004年4月から小児科での診療を始めた大谷氏は途中、中央病院小児科での研修をつづけながら2010年3月までの6年間、岩美病院小児科で

奮闘の日々を送る。

岩美病院の小児科は、風邪などを中心としたコモンディージズの患者さんが大半を占めており、特別、多忙ではありませんでしたが、当初は知識も経験も足りず、たとえば肺炎のお子さんをお家に帰すべきか、入院させるべきか判断に迷うこともありました。しかし、小児科診療に次第に慣れてくると、小児科に転科して地域の皆さ



※鳥取県HPより

この人に 注目

んに安心感を与えられ、まさに自分が理想としていた医療を行っている手応えを感じてきました。

ただ、やはり膠原病・消化器疾患などの難病の診断となると、勉強と経験が中途半端な分、自信を持った診断ができません。たとえば、私は小児膠原病を2例診察したのですが、近くに専門医がないこともあり遠方の医師に相談するなど、対応には本当に苦慮しました。

苦い経験を何度もするうち、高度な小児医療もできる医師になりたいと痛切に望むようになり、専門研修医師支援事業の応募に踏み切ったのです。

大谷氏は今、地域医療を支える医師



上／大谷先生の服の胸には小児科医らしくキャラクターのワッペン
下／自治医科大学とちぎ子ども医療センター内

の育成の重要性を痛感している。いったんは、地域医療を手がけた医師が、一度、研修などで都市圏へ行ってしまつと、鳥取県に戻ってこない例をいくつも見てきたからだ。

実は、専門研修医師支援事業に参加したのは、小児科の知識や経験の修得以外に目的がある。それは、たとえ都市圏に出て行っても、体得した知識や技術を鳥取県に戻って生かす医師を増やすため、自らがモデルケースになることだ。

地域医療の魅力は、若いほど理解しづらいと思います。私自身、一度は地域医療に取り組んだものの鳥取県を去っていく若い医師を何人も見ました。

今回、私は専門研修医師支援事業の採用第2号となったわけですが、残りの医師人生を必ずや鳥取県の地域医療の貢献に費やす覚悟です。これから同事業に参加する医師たちにも同様の覚悟を持ってほしいと切に願います。

若い医師には鳥取での医療がもの足りなく感じるかもしれませんが一人ひとりの患者さんと長い時間じっくりと向き合える魅力は、地域医療ならではのものです。ぜひ、鳥取県で医療を経験した医師たちに、一度は他県に行つたとしても鳥取に戻って医療をするすばらしさに気づいていただきたい。私が、そのモデルケースになれば、これ以上の喜びはありません。

Profile

おおたに・ひでゆき

2001年 自治医科大学卒業
鳥取県立中央病院にて多科ローテート研修
2003年 岩美町国民健康保険岩美病院内科
2004年 岩美町国民健康保険岩美病院小児科
2006年 鳥取県立中央病院小児科にて後期研修
2007年 岩美町国民健康保険岩美病院小児科
2010年 自治医科大学とちぎ子ども医療センター小児科 ※県職員として研修

専門研修医師支援事業に関するお問い合わせ先

鳥取県福祉保健部医療政策課医師確保推進室

〒680-8570

鳥取県鳥取市東町1-220

TEL : 0857-26-7195

URL : <http://www.pref.tottori.lg.jp/dd.aspx?menuid=95963>

育児をしながらキャリアを積む
ステップが今、女性たちの
手によってつくられつつある。

鳥取県立厚生病院外科

田中 裕子氏



Profile

たなか・ゆうこ

- 2006年 鳥取大学医学部医学科卒業
鳥取県立中央病院初期研修
- 2007年 結婚
- 2008年 鳥取県立厚生病院外科後期研修
双子出産

鳥取で活躍する
女性医師

Yuko Tanaka

出産、育児は 女性の人生を 否応なく左右する

働く女性が出産を考えるとときには、多くの選択をしなければならぬ。出産するタイミング、仕事を辞めるか、つづけるならどのような方法で仕事と子育てを両立させるか——。出産は大きな喜びではあるが、それによってどのような選択をすべきか、さまざまな面から考えなければならず、悩みは深刻だ。特に社会的に責任の重い医師という職業に就いている女性の悩みは想像以上に深いものだろう。

ただ、今や医学生数の半数近くが女性で占められるようになって以上、医療機関における女性医師が働きやすい職場づくりは、もはや絶対的に必要で、出産や育児をするハードルをできる限り低くしていく体制が求められて

いる。

鳥取県の主要な医療機関は、いち早く女性医師の出産に関するバックアップ体制を整えつつあり、産休、育児を取得する医師が徐々に増えているそうだ。鳥取県立厚生病院もそのひとつ。同院には、なんと双子の母を務めながら外科の後期研修を受けている女性医師の田中氏がいる。

外科はいまだに女性を敬遠する傾向にある。田中氏が妊娠しているとわかったのは初期研修中。まずは彼女が出産を知ったあとも、外科を専門に決めた選択をひるがえさなかった理由について尋ねた。

「私が外科を意識し始めたのは、鳥取県立中央病院での初期研修2年目のころです。外科の先生に『乳がんに興味はないか』と声をかけられたのがきっかけでした。外科的アプローチの乳がん治療の勉強をしてみると、これが面

白い。そこで、専門に外科を選びました。

とはいえ、外科は緊急手術や、長時間の手術のために体力が必要で、時間もとても不規則。私は、すでに結婚し出産もしたいと思っていたので、外科の道を選択することに対して正直、ためらいはありました」

迷いながらも、やはり外科に進みたいと決意した矢先、妊娠がわかる。

「せっかく授かった命、当然、産もうと思いました。だからといって外科をあきらめるといった発想も持ちませんでした。欲張りなんです（笑）。

夫も協力してくれると言ってくれたので、なんとか乗り切ってみようと覚悟を決めました」

田中氏は初期研修修了後、鳥取県立厚生病院に後期研修医として所属し、間もなく出産し産休に入った。

女性医師を支える 周囲の厚いサポートと 頼れる院内保育所

個人差はあるが、出産は女性にとって大仕事。加えて後期研修を受けながら双子を出産したのであるから田中氏の苦労は、ひときわ大きかったに違いない。と思いきや、実際は驚くほどに周囲の協力を得て、苦労はさうとう軽減されたようだ。

「産前、産後あわせて4ヵ月程度のお休みをいただきましたが、その前後にも、外科部長の吹野俊介先生を中心にまわりの方々がとても気を配ってくださいました。

産前は立っているのが辛いほど体調がすぐれない日がつづいたので、仕事内容を調整してくださいましたし、産後も最初のころは手術の助手のみをさせていただきました。

担当する患者を持たないため、緊急の呼び出しもなく、夜勤も免除していただけて——ここまで融通をきかせていただけたのは、夢にも思わないほど。本当に部長をはじめ外科の皆さんに感謝するばかりです。

けれども、本来ならば私が行わなければならぬ仕事を別の医師にやっていただいているわけですから、心苦しさを感じます。今は、まだ妊娠前と同じようには働きませんが、早く一人前の外科医となり、助けてくれる周囲の皆さんに恩返ししたいですね」

田中氏が今、育児と仕事を両立できているのは、鳥取県立厚生病院にある院内保育所「キッズルームすずかけ」の存在が大きい。

保育時間は延長保育を含めると7時30分から21時まで。希望があれば週2回の24時間保育も可能で、病児病後児



保育や一時保育も行っている。一般の保育所と内容は変わらないが、職場内にあるため母親にとっては、さぞかし安心だろう。2010年10月現在、常時利用児は14名にも上る。

田中氏は、院内保育の利用などもあるが、やや余裕ができ、少しずつ手術を受け持ち始めた。田中氏に負担がかかりすぎず、しかし同期の医師とのスキルに差ができないよう、外科部長をはじめとするまわりの人々がサポートする——女性医師にとって働きやすい風土が、鳥取県立厚生病院には根づいているようだ。

女性のキャリアアップのルートが、今切り拓かれつつある

田中氏は、妊娠から出産、そして現在にいたるまでを振り返り、「医師を辞めようと考えたことは、ありません」と、きっぱり話す。

「まだ、後期研修中で一人前ではありませんが、医学部時代から初期研修、後期研修と多くの方々に懸命に教育、指導していただき、ようやくここまで成長できました。お世話になった方々の御恩を考えると、とても簡単に辞めようなどとは思えません。」

これからどんなキャリアをめざすかは模索中ですが、私を育ててくださっ

た方々の思いに応えながら鳥取の医療にたずさわっていくつもりです」

田中氏のように若いうちに出産してからキャリアを積んでいく道があり、また一方で、ある程度のキャリアを積んで落ち着いたところで出産する道もある。

女性医師が成長していくルートはひとつではない。どの道も、まだまだ決して楽ではないが、一人ひとりの女性医師が仕事と結婚、あるいは育児を両立させる良き前例を示せば、必ずあとを追う後輩も出てくるはずだ。

「これまで、多くの女性医師が出産を理由に医療の現場から離れていきましたが、私は医師であることをあきらめなくても良いと思っています。出産の経験は、医療をつづけるうえでも意味は大きいですし、なんとか出産・育児と仕事を両立させる方向で考えてほしいですね。」

ただ、両立には周囲の理解と協力が不可欠で、私は幸運にも鳥取県立厚生病院にいて、たいへん恵まれていたと思います。

最近では当院のように院内保育所を設置する病院も増えてきましたし、徐々に環境は整いつつあります。今後、誰もが躊躇なく出産できる体制が整い医療現場の人々の理解が深まるよう願っています」

仕事、出産、育児——これらすべてを、女性医師が手に入れるのは、実際のところ、まだ容易と言える段階ではない。

しかし、少なくとも鳥取県では女性

医師が働きやすい体制づくりが積極的に進められていることがわかった。田中氏をはじめとする果敢な女性たちの奮闘が、医療界の新時代を築いていくのだろう。



来たれ
研修医!

日本赤十字社鳥取赤十字病院

鳥取県の東部地域における中核病院の日本赤十字社鳥取赤十字病院。
急性期を中心とした17診療科を持つ総合病院だ。
赤十字病院として、災害時の救護救援活動を重視し、
その機能を遺憾なく発揮し地域住民の期待に応えるため、訓練等を積極的に行っている。
人道博愛の赤十字精神にもとづいた医療提供を基本とする
同院で行われている研修について取材した。



当院は伝統的に
職員間の仲がたいへん良く、
「医師は医師が育てるもの」とは
誰も思っていないません。

副院長

西土井英昭氏

る。しかも、若い医師の教育に熱心。簡単な手技はほとんど研修医にやっていただき、実践による教育を重視しています。

3つ目は、消化器系が圧倒的に強い点。内科、外科ともに消化器系の医師の層が厚く、鳥取県内の手術症例数は最多です。消化器に関心のある方には理想的な研修を提供できるでしょう。

Q 今の若い人たちの人間性を育てるのは、かなり困難なのではないかと感じますが。

当院は伝統的に職員間の仲がたいへん良く、「医師は医師が育てるもの」と

は誰も思っていないません。コ・メディカル、看護婦さんをはじめ、放射線技師さんや臨床検査技師さん——医療にたずさわる医療者みんなで医師を育てようとの土壌があります。

さまざまな職種スタッフとコミュニケーションをとって医療は医師ひとりでは担えるものではないのだとわかれば、みんなに「先生」と呼ばれる立場になっても、いわゆる天狗になったりはしないでしょう。

当院ではカリキュラムに、「看護師から学ぶ」「臨床検査技師から学ぶ」「放射線技師から学ぶ」などの内容が組み込まれています。

やはり、プロはプロ。中途半端な知識や技術を持つ医師から学ぶより、はるかに力がつきます。

Q スバリ日本赤十字社鳥取赤十字病院（以下、鳥取赤十字病院）の研修の特徴は？

3つあります。
ひとつは、医師の心構えや人間性を磨く大切さを、医療の手技や知識を修得しながら身につけられるようにしています。

2番目は、十分な臨床経験をしっかりと積めることです。当院の医師は、30〜40代が中心で、脂が乗り切つてい

そういった中で、コ・メディカルの方などを尊敬する気持ちが生まれ、自然とチーム医療が育まれます。

Q 貴院では、職員の方の教育にも熱心に取り組んでいるそうですね。

研修医の教育、職員の教育に力を入れています。毎週水曜日朝7時半からのモーニングレクチャーには研修医以外に看護師さん、検査技師さん、栄養士さん、薬剤師さん、事務職員など多くの参加者がつめかけます。そして、院内集談会では、各部署から新しい取り組み、知見などが発表され、知らず知らずのうちに学会発表のトレーニングができ、この中から全国学会で発表したものを「鳥取赤十字病院医学雑誌」に論文として掲載しています。

Q 赤十字病院のグループ病院で研修を受けるメリットがあれば教えてください。

赤十字病院は、全国92施設ありますが、この中で研修を相互乗り入れで行うプログラムができています。当院でも地域医療を他県の赤十字病院で受けられるように計画していますし、後期研修医の受け入れ等も全国レベルで行っています。また、全国の赤十字病院に在籍している研修医の交流会もあります。

Q 初期研修医をそのまま後期研修医として鳥取赤十字病院へ定着させるために、工夫していることはありますか。



1年に1冊発刊される「鳥取赤十字病院医学雑誌」。同院のあらゆる職種の医療者の原稿が掲載されている。西土井氏が編集長を務めるようになり、内容も充実、年々厚さが増しているという

私は、初期研修医には「当院に残らなくていい」と言っています。大学での研究や、がんセンターなどでの修行をする経験を持つべきだと確信するからです。

ある程度厳しい世界で研究をしたり論文を書いたりもせず、変化のない環境の中に身を置いたままでは、優秀な医師に育ちません。

とにかく医局に入ったり、なんでもいいから研究をして、ものの考え方をきちっと学ぶ時期は必要です。少しは怒られる経験も(笑)。

Q 今年マッチングした研修医は広島大学の卒業生だと、お聞きしました。他県から研修医が来ることはよくあるのですか？

初めてですね、まったく鳥取に縁もゆかりもない人が当院の研修医になるのは。僕の説明を聞いて決めてくれたそうで感激しています。

もう少し当院の良さのPRの仕方を工夫したら、もっと研修医が集まってくれるのかもしれませんが、どうも苦手で……。ただ、そうも言っていられませんが、これからは積極的なPRに努めていくつもりです。

Q 今、課題だと考えている点があれば教えてください。

ば教えてください。

PRもそうですが、カリキュラムの改訂をしなければならないと思っています。

当院での研修が、確実に、専門医への第1ステップ、第2ステップへとつながるようなカリキュラムにする予定です。専門医の資格をとれるだけの十分な症例数はありますが、それだけでなく症例を一つひとつ記憶にとどめてもらうには、どうすればいいのかを考えています。

当院の研修医には、将来、ハイクラスの専門医になってほしいと願っていますので、そのための労をいとうつもりはありません。

Q どういう研修医の方にきてほしいですか。

学生の延長で研修を受けるような人には、きてほしくない。

医師免許証をもらったなら、もう一人前の医師で、患者さんもそう思って診察を受けるのですから、やはり独立心のある人ですね。

医師の職責の重さを十分に自覚して自ら勉強できる研修医の皆さんとともに、地域に役立つ医療を提供していきたいです。



西伯病院院長の田村矩章氏

医師には、個性を發揮し、
やりたいことに挑戦してもらおう。
それが西伯病院流。

から西伯病院の副院長、2006年からは院長を務めている。

田村氏が消化器内科専門医から一般内科医になり、地域に根ざした医療に取り組もうと決意したのは40歳代になってから。

「当時の西伯病院の院長から誘われて副院長として赴任し、診療を始めたころ、診察にきている高齢者と話しているうちに、自分が子どもであった時代にお世話になった大人たちとダブリました。そのときから、真剣に地域医療のあり方について考えるようになったのです」

以来20年余にわたって、より効率的なサービスのあり方を模索する中で、田村氏は、住民にとって最適の医療の追求のためには保健と福祉部門との連携を強化し、できるだけ無駄を省く努力が必要だと考えるようになった。

■病院の使命である治療と同じくらい重要なのが、病気の予防に関する活動だと田村氏は考える。

月に1回は病院内で、要請があった

ときには休日や夜間に地域に出かけて行き生活習慣病の予防に関する健康教育室を開いている。

「私の講演の主なテーマは『すこやかな一生を送るための生活習慣』ですが、聴衆のほとんどは私より年配で、お元気にすごしておられる人たち。そういう方たちに向かって、高齢期の中では若輩者である私がお話するのは面映い感じがします。そこで、『これから良いと信じる生活習慣に関するお話をしますがいかがでしょうか、ご意見をお聞かせください』と対話をしながら進めています」

西伯病院ではまた、田村氏の意向のもと、検診事業にも力を入れている。「検診は普通平日に行っていますが、受診者の多くは時間的に余裕のある高齢者です。その結果、平日に仕事を休めない働き盛り、つまり一家の大黒柱が盲点となっています。そこで、私たちは年間6回ほど日曜日に検診をしています」

健康な生活を送れるよう、病気になる前の生活にまで注意を払っていき

病 院 探 訪

南部町国民健康保険 西伯病院

南部町国民健康保険西伯病院は2009年、鳥取大学との医療連携ネットワーク「おしどりネット」のモデル施設となった。病気を“治す”だけでなく、“支える”役割も果たせる病院をめざす同院の田村矩章病院長。田村氏から発せられる言葉は地域医療の魅力にあふれていた。

■鳥取県西部に位置し、人口1万2000人を抱える南部町の北西、島根県境に近い、法勝寺川沿いに建つ南部町国民健康保険西伯病院（以下、西伯病院）。

院長の田村矩章氏は、倉敷中央病院で研修し、母校・鳥取大学第二内科にて消化器内科専門医師としての研鑽を積む。その後、済生会江津総合病院、国立浜田病院、島根県立中央病院などの中核病院での勤務を経て1988年

い、それが田村氏の願いなのだ。

■田村氏の地域医療への情熱は、他の医師にも確実に伝わっているようだ。医師数が減った時期もあったが、柱となっている医師が踏みとどまっているうちに、少しずつ若い医師が赴任するようにになった。

医師不足で地域医療の崩壊が危惧される状況にあつて、田村氏の情熱だけで、医師が集まるとは思えない。西伯病院がこうまで医師をひきつけるのはなぜなのか。

「当院では、医師それぞれの個性を尊重し、できるだけ本人の希望に沿った医療をしてもらっています。新しく挑戦したい活動や事業があれば計画を出してくれと声かけをしています。特に若いときにはやりたいことが次々に浮かび、実際に着手してみたいもの。その気持ちを大切にして具現化できるような環境づくりをするのが私の務め。また、幸い今集まっている医師は皆さん懸命に診療をされており、それぞれ住民の皆さんからの信頼も厚く、結果、医師が働きやすい職場となり定着してくれているのだと思います。しかし、将来若い医師が新しい分野でさらに高度な研修を受けたいと希望した場合に、拘束するのではなく夢を叶えられ

るよう気持ち良く送り出さなくてはならないと思っています」

■同院では、地域医療といえども診療の質の向上を怠ることはない。限られた人材や資源を有効活用するため、高度な診療機能を備えた急性期病院での診療が適当と判断した場合には速やかに紹介し、急性期を脱した後、希望した患者のみを引き受けるようにしている。広域内での病・病、病・診間での連携に積極的に取り組んでいるのだ。診療の質の向上にとって、もっとも

医療連携ネットワーク 「おしどりネット」参加で、 地域医療を牽引する。

大きな力になっているのは、2009年に運用開始となった鳥取県西部地区医療連携ネットワーク・電子カルテ相互参照プロジェクト「おしどりネット」。鳥取大学との間で、紹介患者のカルテ記事、検査・画像記録、入院患者では食事・排泄記録まで詳細に記録して情報を共有し、結果、転院後の余分な問診や重複する検査の大部分が省略され、スムーズな治療継続が可能となった。

方針の決定を行えるので非常に助かっています。患者を動かさずに大学に搬送するか、当院で治療を継続するか決定でき、搬送する場合には大学で十分な準備が可能なので、患者さんの体力と心理的な消耗の軽減にもつながっています。

将来的には、この『鳥取情報ハイウェイ』回線の利用によって医療連携ネットワークが鳥取県全体に広がり病・病、病・診間のシームレスな連携が促進され、患者さんの負担を減らし医療費の無駄を省ければと願っています。

昔は病気が治らなければ大半の人は亡くなっていました。現在では死なずに身体機能障害、さらに自立困難の状態で生活をしなければならぬ人が多くなっています。行政との密接な連携のもとに、そのような人たちを支える医療を継続するためにも、ぜひ若い医師にも地域医療に加わってほしいと思っています」



入院しているほとんどが高齢者の院内には、昭和の時代を再現した通りがあり、夕陽が沈む時間帯の演出も可能だ

南部町国民健康保険西伯病院の
見学などのお問い合わせ先
南部町国民健康保険西伯病院

〒683-0323
鳥取県西伯郡南部町優397
TEL : 0859- 66-2211
FAX : 0859- 66-4012
URL : <http://www.town.nanbu.tottori.jp/p/admin/saihakubyoin/>



鳥取の 研修医たちの声

研修内容を個人の希望に沿って柔軟に変更してもらえる

鳥取県立厚生病院1年次研修医

中山 明香里氏

当院は中部地域における中核病院として1～3次救急を担当し、地域に密着した医療を提供している病院です。先生方はもちろん、看護師さん、co-workerの皆さんとの距離が近く、誰にでも相談しやすい雰囲気の中で、安心して研修させてもらっています。それぞれの立場からの病院や医療、患者さん等に対する見方、考え方を学ばせてもらい自分の視野を広げられる良い環境だと感じています。

また、研修内容を個人の希望に沿って

柔軟に変更してもらえるところも魅力のひとつです。私はGIFの手技を身につけたかったため、6ヵ月間通して毎週患者さんにGIFを施行させていただきました。広く知識や手技を修得できることに加え、自分が興味ある部分も伸ばせる当院の研修は本当にありがたいです。

まだ研修1

年目であり、その日その日のことでつい余裕がなくなってしまうがちなのですが、与えられることをこなすだけでなく、向上心を忘れずに、今後さらに成長していきたいと思えます。



研修に必要なものを模索するひとり研修医は子育てにも懸命

鳥取生協病院初期臨床研修1年次

小松 宏彰氏

当院での2010年卒の研修医は自分ひとりです。最初は「研修医が多い大きな病院はみんなで切磋琢磨するのだろうな」とか、「助け合いの研修ができそうだ」とうらやましく感じていました。しかし実際半年間の研修をしてみて、むしろ、ひとり研修医のメリットのほうが多すぎて、非常に恵まれた研修ができていると実感しています。貴重な症例も全部診られますし、貴重な手技も全部自分にさせてもらえます。

最初はそういった多くの手技をさせてもらえることに喜びを感じていましたが、内科研修を一通り修了して思うのは手技はモチベーションを維持していただけでした。研修に本当に必要なのは、医療を実践していく中で動いていく流れや、パターン、患者の思いや考えを認識すること、また、医者以外の医療従事者の価値観や視野、医者として必要な価値観や行動力などを包括的に把握し、今後、ひとりで医療を

展開することを可能にする基盤をつくり上げていくことではないかと思うようになってきました。

研修医は遅くまで病院で……というイメージがありますが、決してそうでもありません。日中に休憩はありませんが、必要な仕事をすませれば6時や7時の帰宅も十分に可能です。実は、2010年3月末に長女が誕生し、子育てをしながら研修をしています。家族ですごく時間も十分に与えていただき、公私ともに満足のいく生活を送っております。

子育てをしながらのひとり研修はおそらく異色な研修ではありますが、当院で研修をさせていただいて、とても充実した日々を送っていることを同級生あるいは後輩たちに伝えたいと思います。



『KLINIKOS』冬号2冊目の 編集を終えて

冬号としては2冊目となる本号の取材は11月、残念ながらもまだ大山の頂に冠雪はなく少々淋しく感じました。今年の2月に訪れた際の雪化粧のすばらしさが忘れられません。

表紙を飾る山陰労災病院院長／石部裕一先生の写真は、同院屋上に出たの撮影によるものでしたが、こちらもまた残念ながら、曇り空のせいで大山は麓しか見えませんでした。それでも、左手に静かな日本海、右手に大山の山麓を見渡す風景は絶景でした。

少々大きさに聞こえるかもしれませんが、日常を東京ですごす取材陣にとってそれは、声を失うほどのパノラマでした。

気が滅入ったとき、自分の医療に行き詰まったとき、この絶対的な自然とすばらしい風景があれば、十分に気分転換できるのではないのでしょうか。行くべき道も、見えてくると思います。医療に限らず、何かに打ち込むには絶好の地なのだと感じます、鳥取県は。

制作スタッフ一同

STAFF

発行	鳥取県福祉保健部医療政策課 (http://www.pref.tottori.lg.jp)
編集制作	株式会社メディカル・プリンシプル社 (http://www.medical-principle.co.jp)
編集協力	株式会社カレット (http://www.care-t.co.jp)
編集長	中村敬彦
副編集長	及川佐知枝
制作コーディネーター	杉浦美奈子
ライター	清水洋一 横山奈緒
アートディレクター	鈴木道雄
カメラマン	片岡正一郎

KLINIKOS
ととりの医療
冬号
2011 winter

鳥取県は県内で働く医師を求めています。

鳥取県は医師のキャリア形成を支援しています。

キャリア形成を考えている方へ

鳥取県専門研修医師支援事業

鳥取県医師海外留学資金貸付制度

国内の医療機関に県職員として研修派遣します。 海外留学のための就学資金を貸し付けます。

地域医療に関心ある方へ

医師登録・派遣システム（ローテートコース）

複数の公立病院等をローテートしながら、鳥取の医療現場を経験します。

子育て等で現場を離れられ、復帰を考えている方へ

医師登録・派遣システム（子育て離職医師等復帰支援コース）

現場復帰のための研修を県立病院、鳥取大学医学部附属病院で行います。

県内の求人情報を探している方へ

県内の医療機関からの求人情報の提供、医療機関へのあっせん、紹介を行います。
※病院見学される場合は、旅費を支払います。

鳥取県も医師不足です。平成22年に厚生労働省が実施した調査によると、県内の病院では、約170人の医師を求人しています。

<http://www.pref.tottori.lg.jp/iryouseisaku/>

鳥取県 医師確保

検索

鳥取県臨床研修指定病院協議会のホームページができました。

全国の医学生などに、鳥取県、鳥取県の臨床研修病院の魅力について知ってもらうため、ホームページを作成しました。このホームページは、みんなで意見交換のできる掲示板、各病院の魅力を集めたプロモーションビデオなどがあり、魅力満載です。ぜひご覧ください。



<http://www.tori-rinsyou.jp/index.php>

鳥取県 臨床研修

検索



■お問い合わせ先 **鳥取県庁福祉保健部医療政策課医師確保推進室**

〒680-8570 鳥取県鳥取市東町1-220

電話：0857-26-7195 ファクシミリ：0857-21-3048 E-mail：iryouseisaku@pref.tottori.jp